

## なかつたごとき戦争 大口玲子

ラジオの国会中継を聴いて、「七十年」という年月は、戦争の体験者が少数になっていき、戦争の体験や記憶が歴史になっていく大きな節目である」という内容の発言が耳に残った。戦後七十年という節目に出る総理談話に関する話題であるが、この七十年間、おびただしい数の「戦争の体験や記憶」が短歌形式で表現されてきたことを改めて思ったのである。

- ・ ひもすがら遊ぶ春野の地平より何もあらはれず空よりも来ず
  - ・ 七十年も敵機のやつてこない空 噴煙のやうな積雲が聳つ
- 志垣澄幸歌集『日月集』には戦争の記憶が繰り返し歌われているが、右の二首は「何もあらはれず」「来ず」「敵機のやつてこない空」という打ち消しが、かつてそこに確かに現れて爆撃を繰り返した敵機のしぶとさを想起させて不穏な気配がある。のどかな春の野原、綿雲がそびえ立つ晴天という現在の平穏な風景に、志垣はあえて戦争の記憶を負わせようとしているのである。
- ・ 老人のいない空港 戦争に殺されし者に待つ便はなく
  - ・ かたちあるものしか見えぬわれの目に死者らは見えずまして若き死者は

- ・ 一月の田に笠二つその下の二つの顔と二つのいのち
- ・ 一月の雨にかがみて田植えする人よなかつたごとき戦争
- ・ うしないしハモニカのごと忘れいし北爆という言葉のひびき

佐佐木幸綱歌集『ぼろぼろとろとろ』の「ハノイ空港」は、ベトナム戦争の記憶を歌う一連である。「七十年」前よりも新しい記憶であるが、戦跡も戦争の体験者も登場しない。現在の高齢層が多く戦争で亡くなっているために平均年齢が二十七歳というベトナムの現実、伝統的な葉笠をかぶって働く人がいる昔ながらの風景。戦争の傷跡が目に見える形ではわかりにくくなっているベトナムの現在として「老人のいない空港」や「田植えする人」が歌われることで、その背景に確かに存在する膨大な数の戦死者と民間の犠牲者が立ち現れてくる。四十年前に苛烈を極めたベトナム戦争を「なかつたごとき戦争」と思わせるのは、雨の中がんで田植えをする二人の「いのち」の明るさ、田植えの風景の絵画的なのどかさである。この逆説的な表現は、過去に確かにあつて多くの人の「いのち」を殺した戦争を、圧倒的なインパクトで現在によみがえらせる仕組みとなっている。また、当時盛んに使われ、今は忘れられたような「北爆」という言葉への懐古に似た感情は、その言葉自体が表す本来の暴力性と、それによって破壊され命を奪われたあまたの無防備な存在を否応なく引き連れてくるようだ。

- ・ 写真に見し一直線の線 路なりビルケナ ウの風は鉄路横切る
- ・ ガス室の跡なりと いう崩れたる煉瓦昨夜の雨にしめれり

『ぼろぼろとろとろ』より。今年「解放七十年」を迎えた「アウシュビッツ」の一連はとぎれとぎれに表記されている。世界文化遺産に登録され、すでに歴史となりつつあるこの遺構を吹き抜ける風、そして煉瓦を濡らす雨は、ここで行われた虐殺を過去の歴史とせず、新たにまなましい記憶として読者の心に刻もうとするものである。